

広島へ行って

男山中学校2年

田中紫織

私は、平和大使として広島へ行く前までは原爆についてのことをほとんど知りませんでした。しかし、広島へ行って語り部さんの話を聞いたり、平和祈念式典へ参加したりして、原爆について少しずつ知っていきました。それは思っていたよりもずっと残酷で悲しいものでした。

語り部さんから聞いた話で、周知から聞いた話ではわからなかったことを知ることができました。原爆の熱線や爆風の被害にあって無残な姿になってしまった人、放



射能や黒い雨を浴びてしまった人、原爆の恐ろしさ、いろんなことを教えてくれました。もう、それは衝撃なことばかりでした。私は、原爆を体験し、しかも、それで兄を亡くしてしまっているのに、みんなに原爆のことを話せるくらい、強く生きているその語り部さんがすごいと思いました。

そして、平和資料館では、被爆した人の写真などが飾ってありました。目をそらしたくなるような酷く悲しいものばかりでした。ですが、この平和資料館でいろいろな人に原爆の恐ろしさについて知ってほしいなと思いました。

今年の八月六日の平和記念式典は雨でしたが、たくさんの方が来ていて驚きました。意外に年配の方だけでなく若い人や外国の人が来ていたことにも驚きました。それと同時に、みんな核兵器について、しっかり考えていたことにもうれしく思いました。

そして、平和祈念式典が終わったあと、私たちは2つのグループに分かれて、いろいろな人に核兵

器について思っていることを聞きました。私のグループでは、いろんな年代の方、外国から来た方に話を聞きました。どの方もみんな真剣に答えて下さいました。しかも驚いたことに、どの国の方も核兵器はあつてはならないもの、なくすべきものと言っていました。

私は、どの方もそう思ってくれていることにうれしく思いました。そして、そう思ってくれている人が増えていってほしいなと思いました。

今まで、私は、今の日常が当たり前でしたが、この二日間で、その当たり前の日常こそが平和なのだと思ってきました。私は、広島へ行って、平和について、核兵器について深く考えさせられました。この二日間は、それを改めて考えさせてくれるとてもいい機会となりました。

これから平和のために、まずは世界中の多くの人に、原爆を体験された方の気持ちや核兵器の恐ろしさを知ってもらおうことが大切だと思います。

そして、みんなが核兵器についてしっかり考えていくべきだと思います。

これから私は、戦争のない平和な世界にしていきたいに、できるかぎりのことをしていきたいです。そして、核兵器がなくなることが祈ります。

ヒロシマの悲劇を忘れない

男山中学校3年

成光智哉

原子爆弾の被害について語り部さんに聞きました。

原子爆弾は、語り部さんが小学校の頃に投下されました。投下される前、小学校ではグラウンドを畑にして、食べ物を育てたり、防空壕を作ったりしていたそうです。今では、あつて当たり前の夏休みも、この頃はありませんでした。

中学校は、五年間で卒業でき、その五年で男子は、兵隊になるための訓練を受けたり、空襲による火事を防ぐために家を壊したり、女子は、男子が壊した所の片付けをしたりしていたそうです。

原子爆弾が投下された日は、青

空が広がっていて、快晴だったそうです。原爆が投下された時、語り部さんは、小学校にいました。語り部さんが通っていた小学校は、爆心地から約4kmあったそうです。投下された原子爆弾は、この学校からも見え、金色に光り、たちまち、赤くなり、太陽のようになりました。語り部さんは、それに見入ってしまった、避難が遅れました。友達が声をかけていたのですが、爆風のせいで、耳が聴こえていませんでした。気が付くと爆風によって、吹き飛ばされた窓ガラスが床にびっしり並んでいたため、避難するために、その上を歩いて、防空壕まで避難し、そこで、先生の指示で家に帰ることになりました。帰る途中で、顔がふくれあがり、体中、灰だらけになった人々とすれ違いながら帰り、家は水道、電気が止まっていたそうです。

僕は、この話を聞いて、原子爆弾に対する考えが変わりました。話を聞く前は、広島と長崎に投下

し、たくさんの方の命を奪ったという薄い考えでいました。話を聞いた後には、投下されて、後遺症に苦しみながら生き、身内が亡くなった人は、心に悲しいという気持ちを持ちながら、一生を過ごしていた人が多いということを知って悲しくなりました。

平和祈念式典では、たくさんの方の人が来られています。市長や小学生が宣言をしたり、ひろしま平和の歌を合唱したりしました。たくさんの方が平和を願っていることを感じるようになりました。

式典後のインタビューをした時にも、核兵器は無くすべきという意見があり、外国の人も、平和を願っていて、国は関係なく、人々の平和に対する気持ちは、同じものだと思います。この二日間で、たくさんの方のことを学べたと思います。いろいろな話を聞くことによって、再び、平和を願う気持ちが芽生えてきました。

この二日間のことを忘れないようにし、世界の平和を願い、貢献

したいと思います。



八・六

忘れないあの日をあの時を

男山第二中学校3年

中尾溪悟

六十九年前の八月六日、八時十五分、広島に一発の悪魔の爆弾が投下されました。

一瞬の閃光と共に広島は、瞬く間に火の海となり、多くの尊い命を奪いました。

また、爆心地から離れた所でも爆風による被害や午後以降に降った放射能を含んだ雨、「黒い雨」を浴び

て、原爆の熱線や爆風からの被害は逃れたものの、敗血症や白血病、いわゆる「原爆症」にかかり、命を落とされた方、今でも苦しんでいる方がいます。

そんな広島のある時のことをよく知ろうと、僕は、この平和大使に参加しました。

実際に広島を訪れて、被爆した人の話を聞かせて頂いたり、式典に出席したり、平和資料館を訪れたりする中で、マスコミの報道だけが決って分らないような事がたくさんあり、少しずつあの時何があったのかが、はっきりと見えてきました。

その見えてきた事のあまりの凄惨さに、僕は、言葉を失いました。

火の海となり、阿鼻叫喚の生き地獄となった広島市内、超高温の熱線に焼かれて、はれ上がった顔、ただれた皮膚、そして今なお残る原爆ドームとなった広島県産業奨励館。

そのどれもが、あの時、何があったのかをしっかりと重く伝えてくれました。

それだけでなく、あの日の後の過酷な生活にもまた、衝撃を受けました。

親を亡くし、家も着る服も無くなった子どもたち、原爆症の後遺症に悩まされた人々、そして、次の世代にも奇形児という形で、その爪痕を残しました。

焼け死んだ人、原爆症で亡くなった人、それだけでなく家も着るものも無くなったが、命だけ残った人、そういった人の無念や苦労を考えると、胸が張り裂けそうになりました。

そんな大きな被害を受けた広島も今日では、復興して大都市に成長しました。

あの惨劇を乗り越えて、日本有数の大都市になった今の広島は、原爆ドームなどに行かないと本当に原爆が投下され、七十年は、人が住めないと言われた所とは到底思えません。

六十九年がたった今、八月六日になる度に、「ああ、今日は原爆が落ちた日だ」とは思うものの、次の日には、すっかり忘れてしまう

ように風化してしまっています。

実際に自分がそうだったのですが、今回を機に、それを改めようと思いました。

普段、なかなか考えることのない「平和」、今回は、それを考えることの出来るとても良い機会となりました。

そして、今回参加した平和式典の中で心に残った言葉があります。それは、子ども代表の平和への誓いの中にあつた「当たり前であることが、平和なのだと思いつきました。」という部分です。

当たり前の日常が続く事が何より平和なのだ、改めて気付かせてくれました。

この二日間は、あの時の事をよく知るといふ目的だけでなく、それ以上の物を得ることが出来、とても有意義なものになりました。

この二日間の事を忘れずに、僕も世界平和に貢献したいと思えます。

最後に、少しでも早い核兵器廃絶と世界平和の実現を心から願います。



平和大使を終えて

男山第二中学校3年

中谷咲耶

私は、今まで戦争について詳しく知りませんでした。たびたびテレビなどでも取り上げられたり、ドラマなどになったりしていましたが、見るのがこわくて避けていました。でも今回、平和大使の一員として、広島に行くことが決まり、「この機会に戦争について少しずつでも知ることができたらいいなあ。」という気持ちを持って参加しました。

一日目、語り部さんの話を聞いて、戦争、原爆の恐ろしさを知りました。戦争中は、学生も教育を充分に受けられずに働いたり、戦

う訓練をしたりしていたこと、米の配給が止められていたことなど、今まで私は何も知りませんでした。語り部さんの話で最も驚かされたのは、爆心地から約四キロメートルも離れた、当時語り部さんが通っていた小学校にも、爆風や熱が届いていたことです。耳が一時聞こえなくなるほどの爆風を受け、腕をさすってしまうほどの熱さを感じたそうです。爆風により、ガラスは窓わくから外れ、爆心地近くには人は全身大やけどを負い、放射能を含む雨水を飲んだ人は、その日のうちに亡くなったなど、原爆によるすさまじい被害について知りました。

平和資料館では、たくさん展示物を見ました。資料館はとても広く、展示物も多かったです。原爆によってボロボロになった服や全身やけどをしたまま歩く人を再現した人形などが一番印象に残っています。被爆前と被爆後の広島町の様子を表した大きな模型もありました。すべての展示物を見ることは、私にとってつらいこと

でした。気力も体力も消耗し、身も心も疲れました。

二日目の平和祈念式典では、安倍首相やケネディ駐日大使も訪れていて、式典の重要さがわかりました。たくさん外国の方もいて、世界的式典であることを知りました。四十三年ぶりの大雨が降っていたけれど、たくさんの方が式典に参加していました。帰宅した後、叔父や塾の先生に「安倍さんは見えた？」と聞かれたのですが、安倍首相がスピーチをしていたのは、私の座っているところから、とても離れていたので見えることはできませんでした。でも、すぐ横をケネディ駐日大使が通って行きました。

式典後、原爆ドームを見て、平和記念公園内でインタビュアーをしました。原爆ドームは写真などで少し見たことはありませんが、初めてじっくり見て、この鉄筋の入ったコンクリートの建物がこんなにもボロボロになるなんて、どれほどの威力があったのだろうと考えさせられました。

平和大使として広島に行き、自身、今まで目を背けていたことに向き合うきっかけを作ることができて良かったです。戦争・原爆とは、家族も友達も離れ離れにし、たくさんの方の命を奪うという、あつてはならないもの。それを知った今、私は心から戦争がこの世からなくなつて欲しいと願います。



戦争・核兵器について考える

男山第三中学校3年

上田壮一

僕は、話やテレビなどでしか戦争のことについて知らず、本当の

ところ戦争がどんなものだったかということを知りたく、広島に行くことにした。

平和公園は火葬場のような雰囲気だった。僕は平和公園を前にして、戦争の恐ろしさを空気だけで感じ取ることができた。

語り部さんの話は、戦争についての恐ろしさがリアルに伝わってきて、この話を世界中の戦争をしている国の人たちに聞いて欲しいと感じた。たくさんの方の罪もない人が一発の爆弾によって、一瞬で命が奪われてしまった。そのときの悲しみを話によって感じることができ、このことを戦争を知らない人たちに伝えなくてはいけないと強く思った。

僕が語り部の方の話の中で、一番印象に残ったのは、爆発時に目立った外傷がなくても、亡くなつていく人がいたということだ。爆発時は命からがら逃げられたとしても、被爆によってさらに多くの方が亡くなられたことに、なんて恐ろしいものなんだと思った。

平和祈念式典では、たくさんの方

人が来ておられて、平和を考える人たちがいることが嬉しかった。ただ、街宣車などの行動を見ると、本当の意味で平和を願っているかどうかかわからなくて悲しくなつた。

平和宣言のように、「絶対悪」である核兵器の廃絶と世界平和の実現に向けて、僕はまだ大きなことではないだろうけれど、自分のできることから少しずつ行動を起こしていきたい。

インタビュアーでは、お年寄りや語り部の方などに原子爆弾による被害、自分たちにどういった影響を及ぼしたのか、この式典に参加した理由や、参加して思ったことなどを教えていただいた。ある語り部の方は、爆心地からとても近くで被爆し、周りの建物が一瞬にして無くなったと言っておられた。僕は、それを聞いて原子爆弾による被害の規模を思い知らされ、こんな自分が自分の住んでいる八幡に落とされたらどうなるものかと恐ろしくなつた。

他にもインタビュアー中に語り部

の方に、被爆した「アオギリ」という木が二本植え替えてあるところに連れて行ってもらった。そこには、熱線で焼かれ爆風で形が変わったアオギリが植え替えてあった。語り部の方は、一つのアオギリを指して、「このアオギリは、熱風で焼かれ皮膚がボロボロになり一歩一歩踏みしめて歩いている人間を思わせる雰囲気がある」と言っておられた。僕はそれがわかったような気がした。僕は皮膚がボロボロになっていた姿を想像することができた。まるでその場を見たかのように残酷な風景が広がって見えた。こんな怖い思いはだれもしたくないと思う。

僕たちは、資料館へも行った。

行く前は、とても残酷なものがあるのだろうと思っていた。入ってみれば、はじめは全く残酷ではなく平気だった。しかし、最後の方に行くにつれて、実物を保存したものなどが出てきて、その瞬間吐きそうになった。とても残酷なものが多くなり、本当にこんなように人になるんだ。なんて残酷なん

だと僕は思った。

もう僕は、二度とあそこには行きたくないが、誰もが一度は行っておくべき場所だと思う。この平和大使として広島に行ったことを通して、全世界に兵隊や核兵器がなくなり、自衛隊などが必要とされないときが来るといいのにと、僕は思った。



広島に行つて思ったこと

男山第三中学校3年

藤原咲葵

私は、以前から「戦争」について、本を読んだり、映画を見たり

することが多くありました。そのため、戦争や広島、長崎に落とされた原子爆弾についても知っていたのですが、現地に着き、当時、原子爆弾を体験し、どれだけひどいことが起こったのか、それを話してくださる方、「語り部さん」と言うのですが、語り部さんの話を聞かせていただき、あらためて、戦争の恐さというものを知ることができました。本や映画などで、もっと早く逃げることができたのではないか？川に入れば、安全なことがあったのですが、実際、町は火にまかれ、逃げ場がなく、川は火の熱で熱くなり、降ってくる火の粉で服は燃える。

私は、戦争をあまく見ていたのだと、語り部さんの話を聞いて思いました。

語り部さんは、ほかにも、どんなけの状態だったか、なぜこんなにも学生が被害にあったのかなど、ふだん見たり聞いたりしているものではない、戦争被害の裏側を知ることができ

ました。

もう一つ、私が衝撃的だったのは、原爆資料館でした。広島の栄えた理由から、戦争が終わるまでのいろいろな資料が置いてあるのですが、私は、この人幡に帰ってきて忘れられないものがありました。

それは、実際に被爆している人の姿をあらわした人形です。前にテレビで、あまりにもリアルすぎるので、撤去されてしまうというニュースを聞いたことがあったのですが、そのまま人形が置いてありました。

資料館に行く前に、語り部さんからの話を聞いたので、どんな風になっていたのか知っていたはずなのですが、人形を見た時、初めて、私は、本当に怖くなりました。

私は、人形のけがの状態というより、人形の表情を見て、とても恐ろしくなりました。

人形の苦しそうな顔、それは、今まで見てきたどんなものよりも、とても恐ろしく感じました。人形を見ただけでこんなに恐ろしく感

じるのだから、きつと当時の人たちは、怖くて怖くてしかたなかったんじゃないかと、私は思います。

資料館を出て、広島町の町を見た時、さつきまで平気だったのに、少し泣きそうになりました。平和な町がある、それは、幸せで贅沢なものなのだと、そして、あらためて原爆ドームを見て、戦争は本当にしてはいけないと感じました。

最後に、私は平和公園の中で、被爆アオギリの木を見ました。爆風と熱線で溶けたように曲がり、焼けたあとがあり、その木には、不思議な雰囲気がありました。被爆した後、もう広島には、草一本も生えないと言われていたそうです。しかし、広島には、今、たくさんのお木や花が咲いています。私たちの世代に出来ることは、平和を願うことです。

広島だけでなく、日本中が戦争で被害を受けました。戦争が起こったことを忘れず、この広島へ行かせてもらった体験を多くの人に伝えたいと思います。



広島平和大使を終えて

男山東中学校2年

新田光輝

広島平和大使に参加する前の僕は、戦争にあまり興味がなく、テレビで戦争の特集を見ても「ふん」としか感じないレベルでした。なぜかというところ、あまり学校などで勉強していなかったということもあるし、勉強してもそこまで興味があつたからです。

一九四五年八月六日、午前八時十五分、高度三万六千六百フィート（約九千六百メートル）から原子爆弾投下。原子爆弾は、広島市の上空六百メートルの空中で炸裂し

ました。爆心地は、島病院の敷地内で、原爆ドームから南東約百五十メートルの地点と推定されています。炸裂と同時に直径約百メートルの「火球」ができました。火球の温度は、炸裂直後、一万分の一秒のとき、半径十七メートルで、セツ氏三十万度、直径百メートルになったとき、セツ氏九千度、一万千度で、爆心地直下では、少なくともセツ氏六千度の照射を受けたものと推定されていました。語り部さんの話にもありましたが、最初、その火球を見た時、初めは鏡の反射のようで、その瞬間に、もう一つの太陽のように光って、体がすごく熱くなつてきて、その火球は、今度、きこの雲に変わって、ふと、後ろを見ると、爆風でふき飛ばされた窓ガラスが教室に散らばつていて、教室には、二人しか残っていないだったので、急いで防空壕に逃げ込んだそうです。空襲警報が解除されて家へ帰る途中に、ぞろぞろとゾンビのような大勢の人とすれ違って、その人たちは、みんな顔がふくれ上がって、

髪もちりちりになって、灰をかぶった人は、皮膚がむけて、ぶらさげながら、歩いていたそうです。語り部さんのお兄さんは、爆心地から近いところに通勤していたらしく、心配になった語り部さんのお母さんは、お兄さんを探しに出かけました。その途中には、腹が裂けて、腸が出ている人や飛び出した目を一生懸命しまおうとしている人がいたそうです。そこから少し進んだ所に橋があつたのですが、炎が激しかったので、近づけなかつたそうです。その橋の下を見ると火傷をして水を求めた無数の死体があつたそうです。

僕は、この話を聞いて、戦争の恐ろしさが分かつた気がします。次に行った平和資料館では、いろいろな展示物があつて、特に印象的だったのは、人影の石です。人影の石は、テレビでもよく出てきていて、熱線の恐ろしさがものすごく伝わってきます。

最後に改めて戦争は、絶対にだめだと思えます。評論家が言っていました、「戦争なんかしなくて

も、大統領どうしがけんかすればいいじゃないか。」と、僕は、この意見を聞いて、まさにその通りだと思いました。この人が言うようにイラクやウクライナなどの地域では、未だに戦争をしています。また、核兵器を製造している国もまだまだあります。

こうした国は、一日でも早く戦争や核兵器の製造をやめてほしいです。

広島での体験を通して

男山東中学校2年

岩崎あすみ

私は、今回平和大使として広島に行き、改めて原子爆弾の残酷さを思い知らされると同時に当時の広島市民の方々が心と体に負った傷の深さを感じることができました。

一日目、まずは広島県原水爆被害者団体会議で語り部さんの話を聞きました。その方は現在八十歳、原爆が投下された六十九年前は小学五年生だったそうです。当時、小学生は勉強をほとんどせずに干

上がった運動場を耕したり、学校の近くにあった竹林から大きな竹をかついで山を下ったりしていたそうです。また、中学生も勉強の時間はなく、男子は、毎週二時間、兵隊になる訓練をしたりしていて、国民全員が国の命令に従う時代だったと言っていました。食べ物、着る物がなくなり、大豆は油だけを軍隊が取っていき、残った、土など肥料に使うという大豆かすを食べていたそうです。そして、八月六日、その日は、よく晴れた日でした。校舎の窓から外を見てみると、遠くの方で突然金色の光が見え、やがて太陽のように真っ赤になり、オレンジ色のきのこ雲が紫色に変わっていったそうです。大変なことが起きたと直感して防空壕へ行こうと後ろを振り返ると、窓が割れてガラスが床に一直列に叩きつけられていました。やっと思いで防空壕へ逃げ込み、しばらくして、警報が解除されて外へ出てみると、あんなに晴れていた空が太陽を隠れるほど灰色になっていたそうです。他にも被爆した町

や人の話をたくさんしていただきました。話を聞き終わった後、今、私たちがこうして勉強しているのは、当たり前ではなくて、すごくありがたいことなんだと思いきらされました。

次に、平和資料館に行き、様々な資料を見ました。中には壊滅した広島街の街、被爆された人々の写真、遺品などもありました。その中でも、私が一番印象に残っているのは、時計です。実際に使われていた懐中時計や市街地に建てていた時計など、展示されている時計全てが八時十五分で止まっているのです。私は、その時計が「あの時を忘れないでほしい。」「あの悲劇を二度と繰り返してはならない。」そう訴えかけてくるように感じました。

二日目、平和祈念式典に参加し、公園内でインタビューを行いました。その中で、ある語り部さんが沼田鈴子さんという方の話をしてくださいました。沼田さんは、二十二歳の時に被爆し、左足を失い何度も死のうと思ったが、被爆ア

オギリが芽を出し生きようとしている姿に励まされ、被爆者の一人として平和の尊さを訴えていきましたが、三年前に亡くなられました。公園内に植えられている被爆アオギリは、幹が大きく傷ついています。けれど、その先には今も青々とした葉がっていました。きつと、当ても広島で被爆された方々の大きな生命力となったのだろうと思えました。

二日間、広島で平和について学習していく中で、思わず目を背けなくなるような現実を見せつけられたこともありましたが、被爆者の平均年齢が七十九歳を超える今、私たちの世代が広島で何があったのかを語り継いでいかなければなりません。二度と同じ過ちを繰り返さないために、今、私にできる小さなことから始めていかなければならないと強く思いました。

